1312

10008

62回水道週間作品コンクール　作文の部

光塩女子学院初等科

6年A組14番　鮫島（さめしま）　麻里菜（まりな）

コクヨ　ケ-10　20×20

『大切な水』

鮫島　麻里菜

令和元年十二月四日、アフガニスタンの武装勢力によって、一人の日本人の命が奪われた。その人の名は中村哲さん。医師である。

「診療所を百個作るよりも、用水路を一本作った方が、どれだけ健康に役立つか。」

私はこの言葉を聞いた時、違和感を覚えた。

「医師なのに用水路？薬ではなく？」

医師は病気の人のために薬やワクチンを処方するのが使命だと思っていたからだ。しかし、中村医師は白衣を脱ぎ、現場の親方として現地の人たちと協力し、用水路の建設に取り組んだ。用水路の建設の仕方は日本の技術を学んだということで、水に対する中村医師の気合や情熱が垣間見えた。

つい先日、私の家で、水が出なくなってしまった。お風呂のお湯も出てこないし、台所や洗面台の蛇口からも水が出ない。最初はそれほど深刻には考えなかった。

「消毒液もあるし、何とかなるよね。」

しかしその考えは一日もたたないうちに消え去った。ペンを使って手が汚れても、先えない。床に座って作業をしていたから、ひざ裏に汗がたまり、かゆくなってきた。しかし、シャワーやお風呂が使えない。のどがかわくのに、水が飲めない。私は普段どれだけ当たり前に水を使っていたのか、たった一日なのに痛いほど思い知らされた。翌日、工事の人が来て下さり、水が使えるようになった。工

事完了後、私が最初にしたのは『水を飲むこと』だった。

「冷たくておいしい！生き返った！」

大げさでなく、心からそう感じた。

体の隅々まで新鮮な水が行き渡るのを実感した。そしてすぐに入浴した。何日もお風呂に入れてなかったわけではないのに、すごくさっぱりした。ひざ裏のかゆみもすっと消えた。

東京の水は「高度浄水処理」により、ペットボトルの水と違わないくらい、いや、それ

以上においしい。そして、いつでも蛇口をひねれば出てくる。当たり前に思えるが、清潔で、汚いものを洗い流してくれる。私は、体の中も外もきれいにし、うるおしてくれる水のありがたさを改めて感じた。

中村医師はこの「水がきれいであること」の大切さを強く訴えていたのである。用水路を作る前のアフガニスタンは干ばつにより、水を得ることができなかった。水が出るとしても、泥水のようなものだけだった。汚い水を飲み、汚い水でしか体を洗えない。きれいになるどころかどんどん不衛生になってしまうのだ。私は、水の せいで人の命までおびやかされる現実を突きつけられた。中村医師の言葉の重みがようやく理解できた。中村医師は、用水路を作ったということだけでなく、アフガニスタンの人々の生活を一八〇度変えてくれた。干からびた砂漠のような土地も、青々とした畑に生まれ変わらせてくれたのだ。

今回私は、中村医師の命をかけた活動を見

聞きすることで、これは決して当たり前ではないことを改めて認識した。今年は世界中でコロナウイルスが大流行している中、日本人が世界に比べて重症化する人が少ないのは、安全な水によって健康な体作りができているからではないかとも思っている。これからも、水を大切に感謝の気持ちを持ちながら飲んだり使ったりしていきたい。